

令和 3 年度

自己評価及び外部評価結果

【事業所概要（事業所記入）】

事業所番号	1670600186
法人名	社会福祉法人 福梅会
事業所名	グループホームほたるの里
所在地	富山県滑川市下梅沢 4 2 4
自己評価作成日	令和3年6月23日

※ 事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度のホームページ等で閲覧してください。

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要（評価機関記入）】

評価機関名	一般社団法人 富山県介護福祉士会		
所在地	939-8084 富山県富山市西中野町1丁目1-18 オフィス西中野ビル 1 階		
訪問調査日	令和3年7月14日	評価結果市町村受理日	令和3年9月3日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点（事業所記入）】

家族や地域住民の協力を得ながら、慣れ親しんだ地域とのつながりを大切にしています。また「こころ まあるく 思いやり みんな仲良く ずーっと私らしく！！」を今年のスローガンとし、利用者の持っている能力を発揮できる様々な場面作りを考え、一緒に行っています。嬉しいことは共に喜び、不安な時は傍に寄り添い、互いを認め合い、助け合い、尊重し合いながら利用者が安心して自分らしく過ごせるように努めています。季節毎に壁画を作り替えたり、季節の花や景色、におい等を感じてもらったりして、ホームにいても常に季節感を感じてもらえるように努めています。また、下肢筋力の向上や維持のために、毎朝のラジオ体操や毎夕のゆとりっち体操に加えて、フロア内の散歩や併設する事業所内の風呂場まで歩いて行く等、少しでも身体を動かしてもらえる機会を設けています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点・工夫点（評価機関記入）】

年間目標は、年度末に全職員の意見を集約し作成している。今年度は利用者の言葉「みんな、仲良く。」を取り入れたものとなった。縁あってここに集う人皆が仲良く毎日を過ごしたい、という思いが目標に込められている。コロナ禍で地域やボランティアとの交流が難しい中、感染防止に努め、県の事業「社会に学ぶー14歳の挑戦」で地元中学生2名を受け入れた。また、四季折々の花めぐり、海や山への外出や外食を楽しんだ。毎月の職員ミーティングでは率直な意見が交わされ、研修は職員が講師となって、現状に即した学びを共有している。一日おきの入浴はデイサービスの施設を利用し、銭湯のような風呂場でゆったりと楽しんでいる。皆で草取りを行い事業所の畑で栽培した野菜は毎日の食卓を彩り、その調理にも利用者が携わる。ホームのそこかしこに、一人ひとりの<私らしい>暮らしが、息づいている。

V. サービスの成果に関する項目（アウトカム項目） ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します。

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる。 (参考項目：23, 24, 25)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています。 (参考項目：9, 10, 19)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員と一緒にゆったりと過ごす場面がある。 (参考項目：18, 38)	<input type="radio"/>	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている。 (参考項目：2, 20)	<input type="radio"/>	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度ある 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている。 (参考項目：38)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている。 (参考項目：4)	<input type="radio"/>	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目：36, 37)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている。 (参考項目：11, 12)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目：49)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う。	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている。 (参考項目：30, 31)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う。	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている。 (参考項目：28)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

1 自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー) です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	年度末に全職員が仕事の振り返りをし、次年度の目標を立てている。その目標と理念を基本にみんなでスローガンを作っている。今年度は「こころ まあるく 思いやり みんな仲良く ずっと私らしく!!」とした。いつでも振り返りができるようにスタッフルームやフロア等、目の届く場所に掲示している。	全職員は、年度末に一年間を振り返るとともに、次年度の目標を作成し、その後全体ミーティングで話し合ったものを共有し事業所目標としている。今年度は、利用者の『みんな仲良く。』の声を取り入れるなど、実践につながる目標となっている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、ボランティアの慰問や実習生、14歳の挑戦の受け入れが難しく、また例年行っていた納涼祭やクリスマス会等の施設全体の行事も中止せざるを得なかった。コロナ禍でも感染状況を見ながら、近隣の飲食店に出掛け協力を得ながら、利用者全員と職員とで昼食を楽しんだ。	コロナ禍で地域とのふれあい企画が激減したが、中でも感染防止対策の上、14歳の挑戦で2名の中学生を受け入れることができ、利用者の笑顔が輝いた。また、恒例の利用者手作り交通安全マスコットを警察に届けたり、近所の喫茶店に出かけるなど、できることはいつも通り行い、地域とともに、を実践している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	馴染みのある地域で何か貢献ができないかとの思いから利用者の出来る事を活かし交通安全マスコットを作り警察署へ届けている。今年で14年目になる。利用者一人ひとりの出来ることを継続していけるように携わっている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2カ月に1回開催し活動報告等をおこない課題や対応について話し合い意見をもらっている。委員に交通安全マスコットを配布し利用者の取り組みを手に取り感じてもらっている。委員からの意見を生かしていけるように議事録を回覧し、職員間でも情報を共有している。	隔月に1回、行政、社会福祉協議会職員、民生委員、家族代表が参加し、活動内容、運営状況等を共有し意見交換をしている。災害時における地域との協力体制等について忌憚なく話し合い、メンバーの民生委員が避難訓練の見学に参加するなど、会議がサービスの向上に活かされている。会議報告は広報で全家族に周知している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議に市役所職員、社協職員に委員として参加してもらうことで、ホームの様子を知ってもらい意見や助言をもらっている。また、法律や制度の改定時に内容等の確認で連携を図っている。	行政担当者には運営推進会議において、事業所の日々の取り組み、利用者の動向等を把握してもらえるよう努めている。入退所者の連絡、制度改定時の連絡相談など、日常的にきめ細かい協力体制を築きながら連携に努めている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束に繋がる行為を行わないことを身体拘束廃止委員会や定例会で申し合わせているが、夜間は職員が1人の為、安全を考えて、転倒リスクの高い利用者にはセンサーマットを使用し、すぐに介助出来るようにしている。また玄関施錠については職員が手薄になるときや利用者が落ち着かないなど、やむを得ない状況である場合に行うことがある。	運営推進会議後に行う定例の身体拘束廃止委員会にて、現状と対策について具体的な事例を通して話し合っている。また、職員研修会では、虐待防止、身体拘束の弊害やスピーチロックについて学ぶなど、話し合いや研修を、日常の利用者対応に活かすよう取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	身体的虐待だけでなくスピーチロック等、言葉による虐待についても気付かないうちに虐待につながっているということが無いように、その都度自身で振り返りができるようにスタッフルームにスローガンを掲げたり、スタッフ同士での注意喚起や定例会で勉強会を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるように支援している	以前入居されていた利用者に成年後見制度を利用していた方がいたので制度について学ぶ機会があった。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には重要事項説明書を基に説明し同意を得ている。また、改定等があればその都度説明書を作成し、説明し同意書を得ている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会時やケアプラン説明時、家族会などで、その都度本人の様子を伝え、家族からの意見や要望など気軽に話せる機会を設けている。把握できた情報は改善や取り組みに反映させている。	家族会を年一回開催し、じっくりと意見を聞く機会としている。家族会では、家族からの要望を受け、連絡手段にメールを取り入れたり、推進会議開催の案内を全家族に周知することが決まった。また、面会時やケアプラン確認などで表出した意見は、そのつど業務日誌に記載し、随時連絡ノートで共有して、意見を反映させるよう努めている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	年1回のアンケートや毎月の定例会で意見や要望が言え、定例会には施設長にも参加してもらい話し合う機会をもうけている。また、年2回事務長との個別面談があり意見や要望を話せる機会になっている。	年度末に全職員アンケートを実施し、頑張ったこと、反省点、悩んでいること、改善できること等々を提出し、意見を集約して話し合い、業務改善に活かしている。また、年2回の事務長面接は率直に意見を言える機会であり、面接での意見は運営に反映させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	定期昇給。パートの年休取得、介護職処遇改善交付金の受給など、労働条件につながる要件は積極的に導入している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部研修に参加してもらい定例会で報告し、共有している。また、定例会でその月の担当者がテーマを決めて内部研修を行っている。新型コロナウイルス感染防止と対策のビデオを見てクイズに取り組み、理解を深めた。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	富山県グループホーム協議会に加入し、協議会が実施する研修会に参加する機会を設け情報交換などを行っている。また、例年であれば市内のグループホームとは、職員の交流研修、利用者の交流会を行い意見、情報の交換を行っているのだが、新型コロナウイルスの感染拡大防止のために実施できていない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人や家族の思いや不安なこと要望などを言葉だけでなく表情や声のトーン、行動などからも把握し、安心して生活できるように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前に話をする機会を持ち、これまでの介護の苦勞を受け止め、不安や要望等を把握し、相談しやすい関係に努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人らしい生活を継続してもらうため、本人や家族からの情報、スタッフの気づきなどから個別対応に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	食事の下ごしらえや盛り付け、おしぼり洗いなど場面場面において利用者が持ち合わせている知識や能力など発揮出来る事を職員と一緒にいたり、利用者の不安な時は寄り添い、利用者からスタッフに労いの言葉を掛けて頂けるなど、お互い支え合いながら過ごしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会や毎月のお便り、年4回の会報の発行で状況報告をしている。また、判断が必要な事項は常に家族と話し合い意見をもらうなど一緒に本人を支えていくという関係性に努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族との外出、外泊、家族や知人・民生委員等の訪問、かかりつけの医療機関の利用、ドライブや買い物等これまでの地域との関係が途切れないようにしている。但し、コロナ禍においては十分な交流が制限されている。	携帯電話で気軽に家族と連絡を取り合う、馴染みの理美容院に出かける、年賀状で近況報告をするなど、個々に添った関係継続の支援を工夫している。コロナ禍ではあるが、利用者にとって馴染みの海や山、花見、近所の喫茶店などにドライブや散歩を楽しみ、日々笑顔を引き出すよう努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	一緒に作業をしたり外出やレクリエーションを行い、利用者同士が楽しい時間を過ごせるようにしている。言い争いになった時は様子を見ながらスタッフが仲介に入り大きなトラブルにならないようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	可能な限りホームでの生活継続を考え、家族や医療機関と話し合いながら利用者のより良い生活環境を模索している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人がどのような生活を送りたいのか、日々の関わりの中で一人ひとりの言葉や訴えに耳を傾け日誌等に記録したり、アセスメントシートに追加情報を記入している。また、カンファレンスの場において職員間で情報を共有し、その思いに添えるように必要に応じて支援の仕方を見直している。	利用者の思いや意向は、個別の業務日誌(入居者日誌)24時間シートに、本人の言葉や対応記録としてきめ細かく記載されている。毎月のカンファレンスでは、日誌や職員の気づきに基づき話し合い、利用者一人ひとりの意向を共有し、日々の支援につながるよう努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時に本人のバックグラウンド情報を家族から提供してもらい、生活歴の把握に努めている。また、入居後においても本人、家族の何気ない会話などから情報把握に努め本人らしい支援につながるようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	それぞれの思いのまま過ごしてもらっている。利用者との関わり、毎日の申し送りや日誌などの記録で利用者一人ひとりの現状の把握に努めている。心身の状態に変化がある時はその都度話し合いその人に合わせた支援をしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日頃の様子から本人の状況や課題を把握し担当職員がケアプランを立て、ケアマネが確認している。毎月のケアカンファレンスでモニタリングを行い、6ヶ月ごとのプラン見直しに繋げている。	個別の業務日誌(入居者日誌)24時間シートや、職員全員カンファレンスで共有した日常生活の様子とともに、本人や面接した家族の思いを包括したものとなるよう努めている。特変がなければ6か月ごとに担当職員が介護計画を立案してケアマネが確認するなど、より本人の状況に即した計画の作成に努めている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	業務日誌に個別の課題を明記し、スタッフが常にその人らしさを意識したケアが行えるように工夫している。また食事量、水分量、排泄記録も把握できるようになっている。特記事項は赤字で記録し、情報の共有、適切なケアや見直しが容易にできるよう工夫している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われなない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	デイサービスの大きなお風呂でゆったり入ってもらったり、支援ハウスやラ・ガーレへは散歩がてらに出かけたり、併設施設の利用者に知り合いがいたら一緒に過ごす等、法人内の機能を活かしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	警察署、消防署へは毎年訪問し安全の協力をお願いしている。外食時には、お店に協力してもらう、小中学校には運動会や文化祭に招待してもらう、推進委員には地区の行事に誘ってもらうなどの協力を得ながら住み慣れた地域での生活を楽しんでいる。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医は本人や家族の希望する医療機関を受診してもらっている。必要に応じて日々の様子など情報を書面で医師に提供し、医師から留意点などの指示をもらっている。基本的には、家族に付き添い受診してもらっているが、不可能な時は往診してもらったり職員が同行している。	入居契約時に信頼しているかかりつけ医を選択してもらい、希望に添ったかかりつけ医への受診支援を行っている。入居者の受診日には、医師への《受診時状況提供書》を家族に依頼して提出し、適切な医療が受けられるよう支援している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師より利用者の健康管理について助言やアドバイスをもらっている。また、体調の変化に気付いた時は、すぐに看護師に伝え指示がもらえるよう24時間体制が整っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	協力医療機関の地域連携室と密接な連携を取り、入院の際は本人の身体状況や生活状況などの情報を提供したり、病状の確認や退院に向けたリハビリの取り組み状況等の話し合いをおこなっている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所時にグループホームでの生活の在り方や支援体制の状況を説明し、ホームでの限界も示して同意を得ている。重度化した場合は、医療機関、家族と話し合い本人にとって最適な場所を選択するための検討を行っている。	事業所の「重度化対応に関する指針」を基本として、重度化や終末期への対応方法や考え方を、入所契約時に説明している。状態変化に伴い、本人・家族の思い、医療、介護体制等に留意しながら、その時々個々の利用者の現状に添った取り組みを話し合い、チーム一丸となった支援をしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の対応の仕方をマニュアル化し、カンファレンス等で確認し合っている。また、看護師から一人ひとりの病状を踏まえて、想定される緊急時の対応等の指導も受けている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	災害時のマニュアルを作成すると共に年2回事業所全体で日中・夜間を想定し火災時の避難訓練を行い避難経路の確認、消火器の取り扱いなどを行っている。また、水害時における避難訓練も行い、避難場所や方法、時間の計測など行った。非常食等の準備もある。	法人は防災ガイドラインを整備し、それを基本に事業所は、年2回の避難訓練ごとに、より実践的な手順書を作成し、災害時には全職員がスムーズな利用者支援となるよう準備している。運営推進会議参加メンバーの避難訓練見学など、今後も継続して地域との連携に取り組むよう努めている。	事業所は、地元消防団員の施設内見学、運営推進会議参加者の避難訓練見学等に取り組んでいる。近隣地域との連携について、より実効性のある協力体制を築いていくための取り組みに期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者一人ひとりの人格を尊重し、声かけ、ケア方法などプライバシーへの配慮に努めながら本人の思いや笑顔が引き出せる対応が出来るよう毎月のカンファレンスで話し合っている。	《いつもの声かけがスピーチロック?》施設内研修では、担当職員が講師となり、スピーチロックの研修会を実施し対応に活かしている。また、認知症、妄想など、そのかわり方について学び、日々、一人ひとりの尊厳を守る実践に繋げるよう取り組んでいる。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	好みの飲み物、好みの衣類など生活の場面場面で思いを確認しながら希望に応じている。上手く思いが伝えられない利用者には聞き方を工夫したり表情や仕草を読み取るなど、思いの把握に努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一日の決められたスケジュールはなく、一人ひとりに思い思いに過ごしてもらっている。ドライブ、買い物、縫物などやりたいと思うことを提案しながら希望に添った過ごし方を心掛けている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	持参の化粧水や乳液をつけたり、衣類を選んで着る、鏡の前で髪や衣服を整える、お気に入りのバッグを身につける、美容院でのカットやパーマなどおしゃれ心を失わない支援を心掛けている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	その日に食べたい物や季節の物など、利用者と相談しながら献立を決め、調理の下ごしらえ、盛り付けなど利用者の出来る事を一緒に行っている。外食に出かけたり誕生日などの特別な日は、利用者の食べたい物を準備するなど、食事を楽しんでいる。	決められた献立は設定せず、毎日利用者と一緒に『きょう、何にしようねえ。何か食べたいものは?』と考え、メニューを決めている。無理強いはないが、ピーラーを使った野菜の皮むき、もやしのひげ取り、盛り付けや片付けなどを協働作業で行うなど、台所仕事の喜びが感じられる食事風景となっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	栄養のバランスを考えながら食事作りをしている。食事制限のある利用者については、医師と相談しながら一人ひとりに応じた支援をしている。また1日の水分摂取量、食事量を記録し予防的体調管理を行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後の口腔ケアは、利用者一人一人に合わせ声掛けや介助で行っている。就寝前には義歯を洗浄液に浸け清潔保持に努めている。また、訪問歯科診療を利用し、口腔内の検診、義歯調整等を行ないおいしく食事ができるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個別日誌や排便表に一人ひとりの排泄状況を記録し把握に努めている。また、尿意・便意が曖昧な利用者の排泄リズムやシグナルの理解に努め、トイレでの排泄を心掛け尊厳を損なわない支援を行っている。	利用者6名が、見守りと声かけにより、排泄のほぼ自立を維持している。排泄の記録や日常の様子から把握した個々のパターンに添って支援し、尊厳ある声のかけ方、誘導を行っている。また、トイレのドアは誰にでもわかりやすい緑色で統一し、利用者の戸惑いが無いよう工夫している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日排便チェックを行ない、野菜や、乳製品、水分の摂取やラジオ体操、散歩などを行ないながら出来るだけ自然排便を心掛けているが、それでも排便がみられない場合は、医師と相談し下剤を使用している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	1日おきに入浴を楽しんでもらっているが、入浴希望により毎日の利用にも対応している。デイサービスの大きなお風呂に自分のペースで入浴を楽しんでもらったり、ゆず湯などで季節感を味わってもらっている。	全員が一日おきに、併設サービスのお風呂に歩いて出かけ(施設内を歩いて数分)、入浴している。湯船と洗い場は、街の銭湯くらいの広さがあり、湯口からは、循環された清潔な湯が流れ続けている。毎日、利用者2名と職員2名体制で、ゆっくりと入浴を楽しんでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中はそれぞれ好きなように過ごしてもらっているが、横になっている時間が長いと思われる場合は、散歩を促すなど状況を見ながら対応している。冬は湯たんぽを入れ安眠出来るように支援している。皆さんがいるフロアでの畳の間で布団を敷いて安心して休まれる方もいる。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個人ファイルに薬の説明書を添付し、スタッフが薬の内容が確認しやすいようにしている。薬が変更になった時は日誌やファイルに記載し申し送りスタッフ全員に周知するまで伝えている。誤薬が無いよう飲む時間毎に色別にしたり、名前の確認、服薬確認をスタッフ同士で声かけながら行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	買い物、掃除、洗濯物干し・たたみ、調理の手伝いなど日常的な作業で出来る事をお願いし感謝の言葉を伝えながら、協働作業の場面をつくらしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	その日の天気や利用者の体調、希望を考慮しながら、散歩やドライブに出かけている。また、地域の協力を得て買い物や外食など外出の機会を作っている。年間行事として花見や日帰り温泉等の企画を計画したいが、コロナの状況を見ながらの実行になる。	コロナ禍での制限もあったが、移りかわる自然を楽しむ利用者の笑顔をみるため、桜、芍薬、菖蒲の見学、また、海へ、山へ、出かけることができた。近所の喫茶店への外食も楽しみ、店舗の協力で、利用者の希望や、量、内容にも配慮されたものとなった。コロナ禍明けには、恒例の日帰り温泉を予定するなど、多様な外出支援を計画している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	基本的にお金の所持はおこなわない。但し、個別の買い物などは代金を立て替えて、一緒にお店に行き品物を選ぶなど買い物が楽しめるように配慮している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族や友人との電話や郵便物、手紙等の取次、年賀状の作成の支援を行い家族や友人との交流の継続を図っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	中庭からは自然の光と風が取り入れられる。みんなが集うフロアでは花を生けたり、毎月の壁画や飾りを作ったり、食事作りの音や匂いなど常時、季節感や日常的な生活が感じ取れる環境である。	リビングとダイニング、畳コーナーでは、中心のカウンターを囲み、利用者と職員が『今日のお昼何にしよう?』『ジャガイモが取れたから使おうか』等々の会話を交わしている。調理の音、匂い、会話、中庭の光、天井の柔らかな灯り、入居者作品が掲示された季節感のある壁面、掃除が行き届いた空間...の中で穏やかに暮らしを営む利用者の姿がある。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	畳の小上がり、ソファや食卓など利用者一人ひとりが過ごしたいところで自由に過ごしている。また、気の合う利用者同士が互いの居室へ訪問しつづけている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅と同じような感覚で過ごせるように、入所時に使い慣れた物や大事にしていた物などを持ち込んでいただくようお願いしている。居室には、カレンダーや家族の写真、大好きな犬のポスターが飾られていたり、思い思いにレイアウトされている。	居室は、畳のある部屋とフローリングの部屋があり、利用者は自宅からそれぞれの好みや思い出の品を持ち込み、その人らしい空間をつくっている。日中は共用空間で仲間とともに過ごすことも多く、清潔に整えられた居室は「私の部屋」として、いつ戻っても心地よく整えられている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレは他の場所と間違わないように色別したり、居室のネームプレートは各自で家族やスタッフが一緒に作り、個性的になるよう工夫している。必要などころには、手すりを配置するなど自立支援に繋がる環境を整えている。		

2 目標達成計画

事業所名 グループホーム ほたるの里

作成日: 令和 3年 8月 11日

目標達成計画は、自己評価及び外部評価結果をもとに職員一同で次のステップへ向けて取り組む目標について話し合います。

目標が一つも無かったり、逆に目標をたくさん掲げすぎて課題が焦点化できなくならないよう、事業所の現在のレベルに合わせた目標水準を考えながら、優先して取り組む具体的な計画を記入します。

【目標達成計画】					
優先順位	項目番号	現状における問題点、課題	目標	目標達成に向けた具体的な取り組み内容	目標達成に要する期間
1	13	災害対策としてマニュアル作成や消防署の協力を得て年2回の避難訓練は実施しているが、地域の消防団や町内会等にどの程度協力を得られるのか、明確には決まっていない。	<ul style="list-style-type: none"> ・スタッフ全員で話し合い、火災・地震・水害それぞれの災害に応じたマニュアル作成をし、手順に沿って避難訓練を実践する。 ・地域との協力体制を整備する。 	運営推進会議の委員や地域の消防団等に避難訓練の様子を実際に見てもらいながら、頂いた意見をもとにマニュアルを見直していく。	今年度中
2					
3					ヶ月
4					ヶ月
5					ヶ月

注) 項目の欄については、自己評価項目のNo.を記入して下さい。項目数が足りない場合は、行を挿入してください。